



Title	第8回デザイン史デザイン学国際会議報告（2012年9月サンパウロ開催）報告
Author(s)	藤田, 治彦
Citation	デザイン理論. 2013, 62, p. 96-97
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56381
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

第8回デザイン史デザイン学国際会議（2012年9月サンパウロ開催）報告

藤田治彦／大阪大学

第8回デザイン史デザイン学国際会議(ICDHS)は、2012年9月4日から6日までの3日間、南米最大で南半球最大の都市でもある、ブラジルのサンパウロで開催された。会場は都心に近い高級住宅地イジエノポリスにあるサンパウロ大学キャンパスとそれに隣接するマッケンジー大学である。開催前9月3日には、都心部と東洋人街のあるリベルダージ地区を巡るコースと、郊外のイピラプエラ公園といくつかのミュージアムやギャラリー等をめぐるコースに分かれて、バスによるプレ・コンフェレンス・ツアーが行われた。



第8回ICDHS（サンパウロ大学マランハオ・キャンパスのアル・ヌーヴォーの学舎）

今回の会議には次のような6つのトラック（発表テーマ群）が設けられ、それぞれの議長と副議長は以下の通りであった。「デザイン教育の歴史」（藤田治彦＋シルビオ・カンペッロ）、「アイデンティティと領域」（オスカー・サリナス・フローレス＋クライス・マツィーリ）、「デザインの国家戦略」（ハヴィエ・ヒメノ・マルチネス＋シンチア・マラゲーティ）、「技術と工学」（ポール・アトキンソン＋チャールズ・ヴィンセント）、「新

しい帝国主義：デザインとデザイン史の国際的な顔」（ジョナサン・ウッドダム＋デニス・ダントス）、「オープン・ストランド（自由テーマ枠）」（ヴィクター・マーゴリン＋プリシラ・ファリアス）。



第8回ICDHS（マッケンジー・プレスビテリアン大学オーディトリウムでのラウンドテーブル）

今回、意匠学会からは、以下の8名が参加し、研究発表を行った。「デザイン教育の歴史」分科会では、9月4日に、藤田治彦が「美術アカデミーとデザイン学校：美術教育とデザイン教育の比較研究」を、天貝義教氏が「19世紀から20世紀にかけての日本における産業デザイン概念の変遷：平山英三と松岡寿を中心に」を、そして近藤存志氏が「ベヴスナーとデザイン教育：美術史教育を通じての現代的要請への対応」を発表し、最終日の9月6日には劉賢国氏による「1870年から1910年までの韓国の印刷、出版、教育におけるジョン・ロスの貢献」の発表が行われた。

「アイデンティティと領域」分科会では、9月4日にサラ・ティズリー氏が「実践の領域：戦後の日本におけるデザインと建築の融合と分離」を、9月5日に吉村典子氏が

「“女性的”領域と日本美術の影響下における近代イギリス住宅のアイデンティティとデザイン」を発表した。「新しい帝国主義」分科会では、9月5日に菊池裕子氏が「大日本帝国の工芸と工芸デザインにおける日本的という概念」について、続いて石川義宗氏が「オリエンタリズムと近代デザインにおける東洋の工芸」についての研究を発表を行った。



第8回 ICDHS (マッケンジー・プレズビテリアン大学オーディトリウム)

今回のICDHSは南米での開催で、遠く離れたアジアからの参加者は非常に少なかった。菊池裕子氏、サラ・ティズリー氏も含めるならば8名の日本からの参加者はむしろ多いほうだといっていいだろう。ICDHSへのアジアからの参加は、2008年に大阪で開催され、40数名の日本人を中心に50名を超えるアジアからの参加者が研究発表を行った第6回会議以後、第7回のブリュッセル、第8回のサンパウロと大きく減少している。次々回の開催候補に中国や台湾も非公式に挙げられてはいるが、仮に実現しても、それが過ぎて再び中南米を含む西洋での開催になれば、同じような参加状態に戻るだろう。

ICDHSはデザイン史デザイン論をおもな対象とした唯一の国際会議で、多くの国際会議が英語文化圏を中心としているのに対して、英米中心ではない運営体制と参加者構成の、その意味でアジアの研究者にとっても理想的

な国際会議である。しかし、現在のアジアからの参加状況からしても、アジアでの開催はせいぜい4ないし5回に1回、つまり8年から10年に1回程度のものになるだろう。

ICDHSの中南米での開催は、2000年の第2回(キューバ・ハバナ)、2004年にメキシコ第2の都市グアダハラで開催された第4回以来3回目だが、国際会議の運営や、この会議に大きな割合を占めるスペイン語系、ポルトガル語系の参加者の国際コミュニケーション能力、英語力はこの10年で見違えるほどに向上した。ICDHS以外の国際会議では、特定の言語を使用する参加者が相当な数に達すると、その言語(例えばスペイン語)をその会議の公用語に加えよといった提案がなされることがあるが、ICDHSではそのような動きはない。スペイン語系・ポルトガル語系の若い世代の参加者の英語力は年々向上しており、英語が必ずしも得意ではない中堅やベテランの研究者たちも、将来を見据えて現実的あるいは実際的な判断をしているのだろう。

日本はデザインの研究では、他のアジア諸国やスペイン語・ポルトガル語圏諸国と比べても、はるかに長い歴史を持っているが、研究レベルの差は縮小しており、国際発信力からすれば明らかに不利な状況にある。大学等で定職にある中堅以上の研究者は開催地がいかに遠方でも参加できるが、非常勤講師等を務める若い研究者や大学院生にとっては、遠い海外で行われる国際会議への参加は簡単ではない。隔年開催のICDHSの第9回会議はポルトガルのアヴェイロでの2014年の開催が決まったが、時期は欧米の研究者にとって都合のいい7月初頭で、授業がある日本の若手教員や大学院生にとっては、参加は容易ではない。この領域での積み重ねのある日本を一つの中心にして、アジアで定期的にこの分野での国際会議を開催することが望まれる。